

# プラトン著『メネクセノス』考

「優れた弁論家 *agathos rêthôr*」について

野 津 悌

注記：原典から訳出引用する際の使用テキストについては、本稿末尾の参考文献一覧を参照。訳出引用の際、テューキュディデースからの引用においてのみ、原典を参照の上岩波文庫所収の久保正彰訳を使用し、必要に応じて引用訳文中にギリシア語原典の言葉を挿入した。その他の著作家からの訳出引用は全て本稿筆者自身の訳に基づいている。

## 序) ソクラテスが語る「追悼弁論」

プラトン著『メネクセノス』は Burnet 版で約20頁の短編である。同著作は対話篇とは言え青年メネクセノスとソクラテスとの間で交わされる対話の部分は冒頭の約3頁と末尾の約1頁にすぎない。残りのほぼ16頁を占めているのはソクラテスの口を通して語られる「追悼弁論 *epitaphios logos (Menex. 236b5)*」(以下「追悼弁論」と略す)である。もっとも対話篇中のソクラテスはこの「追悼弁論」の起草者が自分自身ではないことを明らかにしている。ソクラテスによれば「追悼弁論」は、アテナイ人たちが追悼弁論の語り手を選出しようとしているという噂を聞きつけた「弁論術に関する凡庸ならざる女教師 (*Menex. 235e4-5*)」アスパシアがソクラテスの前で試みに語ってみせたものなのである。

追悼弁論とは都市国家アテナイにおける弁論の一形態である。都市国家アテナイは戦死した人々を弔うために公の葬儀を開催し、国家選出の語り手に追悼弁論を語らせることを慣わしとしていた。この種の追悼弁論の最も有名な例としてテューキュディデースが『歴史』第2巻 (*Hist. ii. 35-46*) の中で伝えているペリクレスによる追悼弁論があり、他にも弁論家リュシアスの『コリントス戦争の援軍として斃れた戦士への葬礼弁論』、弁論家ヒュペレイデスの追悼弁論(断片)、弁論家デモステネスの作として伝わる追悼弁論、が現存する。これら4つの追悼弁論に「追悼弁論」を加えると、アテナイにおいて成立した追悼弁論5編が現存していることになる。

これら5つの追悼弁論のうち「追悼弁論」は特異な存在である。「追悼弁論」の事実上の執筆者プラトンは、彼の『ゴルギアス』『パイドロス』等の著作からもわかるように、弁論術の批判者である。そのプラトンが「追悼弁論」を書いたのである以上、そこには特別な意図があったはずである。本稿の狙いはその意図を明らかにすることにある。

## 1) 典型的な追悼弁論

「追悼弁論」を一読する限りそこに一般的な追悼弁論から逸脱するような明確な特徴を見出すことは難しい。この点が「追悼弁論」を書いたプラトンの意図の理解を困難にしている。

例えば対話篇『メネクセノス』の邦訳者の一人である津村寛二はこの点に関して次のように述べている。

以上の演説（「追悼弁論」）は、追悼演説としてはほぼ典型的なものであると考えられている。現在残されているいくつかの追悼演説を比較してみると、もちろんそこには作者または演説者による違いはあるけれども、演説でとりあげるべき題材、またその順序などに共通の形式があったことがわかる。たとえばこの『メネクセノス』の演説をふくめ、いずれの演説も全体として称賛と慰めの二部分より成っている。その称賛においては、アテナイ人、とくにその生まれをほめること、祖先をほめることなどが共通している。また『メネクセノス』の演説にでてくる題材は、他の作者の演説にもでてくる。たとえばアマゾンとの戦いなどの伝説は、リュシ阿斯、偽デモステネスの演説にもとりあげられ、ペルシア戦争は、リュシ阿斯、偽デモステネス、ヒュペレイデスでもたええられる。アテナイの国制の称賛は、ペリクレス、リュシ阿斯にもある。同様に、遺族に対する慰めと励ましにおいても、類似のテーマを見つけることができる。たとえば、戦死者の息子たちに対する国家の配慮を、ペリクレス、リュシ阿斯、ヒュペレイデスが取り上げている。（『プラトン全集10』244頁7-16行 \*引用文中（ ）内は本稿筆者）

このように津村は「追悼弁論」がアテナイ人の「生まれをほめること」「祖先をほめること」「アテナイの国制の称賛」「戦死者の息子たちに対する国家の称賛」といった追悼弁論に典型的な話題を含むことを指摘し「追悼弁論」が「ほぼ典型的な」追悼弁論であるとしている。

また津村のみならず古典期以降のアテナイの人々もまたプラトンが書いた「追悼弁論」を典型的な追悼弁論として違和感なく受け取ったであろうことを示す証言をキケロが残している。キケロはプラトンの文体を批評する文章の中で、プラトンの手になる「かの公的な演説 popularis oratio」について言及し、その「演説」について「アテナイにおいては集会の中でこの演説を用いて戦没者を賞賛することが慣例になっており、またこの演説があまりに優れていたために、ご存知の通り、毎年その日に朗読されねばならなかった」（*Orat.* 151）と述べている。キケロのこの証言を信じるとしたら、古典期以降のアテナイの人々もまた『メネクセノス』における「追悼弁論」を典型的なしかも優れた追悼弁論であるとみなしていたと考えることができる。

以上のように「追悼弁論」を典型的な追悼弁論であるとみなす見解を前提として、「追悼弁論」を書いたプラトンの意図に関して二つの見解が存在している。

## 2) プラトンの愛国主義、という見解

第一の見解は、同対話篇のもう一人の邦訳者である加来彰俊が同氏の邦訳に付している短い解説の中に見出しうる。加来は、問題の「追悼弁論」に関して「多少パロディ化されているが、そこには、やはりまじめな意図が隠されている」（『プラトン』190頁）、また「その行間に、われわれは、アテナイに対するプラトンの愛国的な熱情と国民意識を知ることができるであろう」（同上）と述べ「追悼弁論」を書いたプラトンの意図が「まじめ」なものであるとしている。これはつまりプラトンが「追悼弁論」において「まじめ」に祖国アテナイを称賛しようとしているということである。

しかしながら「追悼弁論」のうちに見出される祖国アテナイへの愛国心をそのままの形でプラトンその人の思想であるとみなすのは難しい。プラトンは同対話篇の対話部分においてソクラテスに次のように語らせているからである。

いやしかしメネクセノス、戦争で死ぬということは色々な点で結構なことであるようだ。なにしろたとえ貧乏な人が戦死した場合でもその人は見事で盛大な葬式をもらえるし、たとえ[戦死した人が]取るに足らない者であった場合でもその人は賢い人々からの賛美を受けるのだからね。（中略）そして彼らが大変に見事に賞賛するものだから、彼らが戦死者のおのおのに関してあることないこと *ta prosonta kai ta mê* を語り、語句 *ta onomata* により極めて見事に脚色する *poikillein* うちに我々の魂を魔法にかけてしまう *goêteucin* のだ。（*Menex.* 234c1-235a2）

この引用文のうちの「賢い人々」とは文脈から明らかなように追悼弁論を語る「弁論家たち *rhêtores* 235c5」のことである。そしてこの「弁論家たち」は「取るに足らない者」でさえ賛美する人々であり、我々の魂を「魔法にかけてしまう」人々である。

ここでソクラテスはこのような「魔法」を構成する二つの手法を明らかにしている。第一の手法は、戦死者のおのおのに関して「あることないこと」を語ることである。これはつまり事実を歪曲して語るということである。前述の津村は「追悼弁論」における事実の歪曲の具体的事例を指摘し、次のように述べている。

たとえばペルシア戦争について見ても、ダレイオスは口実をかまえてギリシアに侵攻したとされているが（240A）、ヘロドトスによれば、アテナイとエレクトリアは実際に派兵してサルデイスを焼いたのである。馬拉トンの戦いでは、アテナイだけで勝ったように書かれているが（240c）、ヘロドトスはブラタイア軍の来援を伝えている。ペルシアの二回目の侵攻のとき、テルモピュライで死守全滅したスパルタ軍の武勇については一言もふれられず、サラミスの海戦もヘロドトスによるとギリシア連合軍三七八隻（うちアテナイ軍百八十隻）によって戦われたものであるのに、そのことは書かれていないのである。（上掲書、246-247頁）。

また第二の手法は「語句により極めて見事に脚色する」ことである。つまり美辞麗句を用いて聴衆を魅了する修辞技法がこれに当たる。以上のことからプラトン

が『メネクセノス』において「弁論家たち」に対して、聴衆たちを「魔法にかけてしまう」人々つまり聴衆を騙す人々という規定を与えている点が明らかである。

ここでプラトンが「弁論家」たちの働きを「魔法」の比喻を用いて説明している点は重要である。当然のことながら「魔法」をかける人は自分が「魔法」を用いていることを知っている。そうでなければ「魔法」にかけて聞き手を騙すという事態は成立しない。するとプラトンが「弁論家たち」を「魔法」の使い手に喩えている限り、彼の念頭にある「弁論家たち」とは聴衆に偽りの言説を信じ込ませてしまう一方で、彼ら自身はその言説が虚偽であることに気づいているような人々であるということになる。そして、このような「魔法」をかける人々という意味での弁論家の特性は『メネクセノス』において弁論家の手法をまねて「追悼弁論」を執筆しているプラトン自身にも当然当てはまる。すると、プラトンは当時のアテナイの人々を「魔法」にかけて騙すことができるような「追悼弁論」を作成するその一方で、彼自身はその「追悼弁論」がある種の虚偽を語っている点に当然気がついていることになる。

以上のように考えると「追悼弁論」が聞き手の心のうちに惹起しようとしているアテナイへの愛国心をそのままの形でプラトン自身の心のうちに見出すわけにはゆかない。

### 3) 弁論術一般に対する批判、という見解

「追悼弁論」を書いたプラトンの意図に関する第二の見解は前述の津村のものである。同氏は「追悼弁論」に関して以下のように述べている。

『メネクセノス』の対話の部分を考えてみれば、そこに弁論術に対する批判、そして追悼演説というものの自体に対する批判が見られることは明瞭であり、したがって、ソクラテスの語る追悼演説も、弁論術を風刺するために書かれていると考える方が筋が通っている」（上掲書、248頁）

またこのような理解を前提として津村は次のように結論づける。

プラトンは、この演説を作ることによって追悼演説の本性を明らかにし、弁論術に対する自分の考えの正しさを証明してみせたのであり、そのことが、この演説を作る目的であったのである（同書、249頁）。

この津村の見解によれば、プラトンは「追悼弁論」を弁論術一般を風刺する目的で書いたということになる。つまりプラトンは、敢えて典型的な「追悼弁論」を呈示することにより、その弁論のうちにみられる「魔法」を暴露し、そのことによって「（聴衆を）魔法にかけること」という弁論術一般に固有の働きを批判しようとしているということである。しかしこの見解にも疑問が残る。

何故なら、仮にプラトンが弁論術一般を批判するという目的のために聴衆を「魔法にかけること」のいかかわしさを示す実例を呈示しようと思図したのだとすると、彼がその目的のためにわざわざ追悼弁論という部門を選び出したとは考えにくいからである。なるほど法廷弁論あるいは議会弁論においてならば「魔法

にかけること」がいがわしい行為であるという批判が成立しうる。従ってそのような弁論の実例ならば弁論術一般のいがわしさを風刺する好例となりうるはずである。これに対して追悼弁論の場合には事情が明らかに異なる。例えば「取るに足らない者」(*Menex.* 234c2)を立派な人間であったと讃えることは一種の虚偽ではある。しかしその者が戦死し、公の葬儀での追悼弁論においてひとりの演説者がその者を讃えるという場面においては、たとえその賞賛が虚偽であっても、そのような賞賛をいがわしい行為であるとはいえない事情がある。追悼弁論という部門においてはそのような虚偽こそが最初から求められているからである。そしてそのような虚偽を如何に巧みに語ることができるかを演説者たちは競いあい、聴衆もまたそのことを当然のこととみなしているのである。追悼弁論とはそのような意味で極めて特殊な性格を持つ弁論の一部門である。いわば追悼弁論とは、聴衆を「魔法にかけること」をその固有の働きとする弁論術が、いがわしいとの批判を免れることができる極めて例外的な部門なのである。追悼弁論という部門が持つこのような特殊な性格を考えてみるならば、それは、弁論術一般のいがわしさを糾弾するための実例としては、あまりにも不適切である。そしてこのことをプラトンが意識していなかったとしたらそれはむしろ奇妙である。追悼弁論の持つそのような性格は当時の人々の常識に属するものと考えべきだからである。

例えばプラトンの弟子アリストテレスはこの点をよく知っていた。周知の通りアリストテレスは『弁論術』において弁論の種類を「議会弁論 *symbolêutikon*」「法廷弁論 *dikanikon*」「演示的弁論 *epideiktikon*」という三種類に区別している(cf. *Rhet.* 1357b36-58a8)。「演示的弁論」とは、式典弁論一般を意味し、追悼弁論という部門はこの「演示的弁論」の一部門である。またアリストテレスはこれら弁論の三種類に応じて、それぞれに固有の「判定者」を区別する。それによれば「議会弁論」については「民会の議員」が、「法廷弁論」については「陪審員」が、「演示的弁論」については「見物人」が「判定者」であるという。注目すべきは、アリストテレスがこれら「判定者」が判定する対象を次のように規定している点である。彼によれば「民会の議員」は「未来のこと」について、「陪審員」は「過去のこと」について、そして「見物人」は「語り手の能力」について判定する。これはつまり「民会議員」ならびに「陪審員」の場合には弁論の内容をことからの真偽に着目して判定するのに対し、「見物人」はむしろ「魔法にかけること」の巧拙に着目して判定するということに他ならない。これはつまり追悼弁論を含む「演示的弁論」というものが、巧みに聴衆を「魔法」にかけて騙すことができる「語り手の能力」を競う、特殊な性格を持つ弁論であることをアリストテレスがよく知っていたということである。

また弁論家リュシアスにおいても同様である。彼は自らの追悼弁論の序の部分において、戦没者たちの事績に相応しい言葉を見つけることは不可能であると述べた上で、自分の競争は「彼らの事績」に対する競争ではなく「彼らの事績につ

いて以前に語ってきた人々」に対する競争であると述べている (cf. *Epitaph*. 2)。つまり、リュシ阿斯もまた、彼の追悼弁論が戦没者たちの事績の真実に匹敵する事柄を語ろうとするものではなく、彼以前に追悼弁論をなした者よりも巧みに語ろうとするものであることをここで表明しているのである。リュシアスのこのような言葉は、語り手であるリュシ阿斯のみならず聴衆もまた、追悼弁論の評価基準が真実との一致ではなく「魔法にかけること」の巧拙であるという理解に立っていたことを示すものである。

アリストテレスとリュシアスの以上の言葉からすると、追悼弁論の持つ特殊な性格はおそらく当時の人々に周知のものであったと考えるべきである。そしてそう考える限り「魔法にかけてしまう」という弁論術一般の働きのいかがわしさを批判するためにプラトンが敢えて「追悼弁論」を書いたと考えるのは困難である。確かに「追悼弁論」が、プラトンが自分自身の思想を伝えるために書いたものではないとしたら、それは何らかの皮肉を意図したものであるはずである。その点で津村の指摘は正しい。しかしその皮肉の内実に関しては再検討の余地がある。

#### 4) 追悼弁論というジャンル に対する批判

「追悼弁論」における皮肉の内実を知るには『メネクセノス』全体におけるプラトンの弁論術批判の内実を正しく理解しておくことが重要である。ここでのプラトンの批判の矛先は明らかに弁論術一般ではなく 追悼弁論というジャンルに向かっている。さらにその批判の内実は、追悼弁論が聞き手に「魔法」をかけることのいかがわしさではなく、むしろ追悼弁論におけるそのような「魔法」が脆弱なものに過ぎないという点にある。以下このことを論拠づける。

##### A) 「魔法」の脆弱さ

「魔法」の持つ力の脆弱さに対するプラトンの批判は、ソクラテス自身が追悼弁論の聴衆として弁論を聞いている際に自分の心に生じる作用を説明している次の箇所にある。そこでソクラテスは次のように述べている。

また大抵の場合いつも幾人かの他国の人々 *xenoi* がぼくに同行して一緒に [ 追悼弁論を ] 聞くのだけれど、彼らに対してぼくは忽ちのうちに一層威厳あるものとなるのだ。というのは彼らもまたぼくがこの国に対して [ ぼくが受けたのと ] 同じ印象を受けているかのように僕には思われ *dokûsi moi*、また、彼らが語り手によって説得されて、この国を以前にまして驚嘆すべき国であるとみなしているかのように [ 僕には思われるからなのだ ] (*Menex.*235b2-9)

ここで「同じ印象」というのは、ソクラテスが追悼弁論を聞くことによって自分およびアテナイという国全体を以前よりも「一層偉大で高貴で立派である *meizôn kai gennaioteros kai kalliôn*」(235b2) と感じる印象を指している。そしてこの「同じ印象」を「幾人かの他国の人々」もまた受けていると自らが勝手に考えてしまう思い違いのことをソクラテスはここで述べている (注)。ソクラテスはアテ

ナイの人々にこのような思い違いを引き起こしてしまう追悼弁論の「魔法」の力を表向きには誉めている。しかしそれは意地の悪い皮肉に他ならない。何故なら、そのような考えが思い違いであるという事実は、裏を返せば、追悼弁論の聴衆の中に散在している「他国の人々」は本当は追悼弁論の虚偽を知っていて「同じ印象」など受けてはいない、という事実をほのめかしているからである。このように考えると、対話篇中のソクラテスの弁論術批判の矛先は、アテナイ人を騙すことができても「他国の人々」までは騙すことができない<追悼弁論というジャンル>に典型的にみられる説得力の弱さへと向けられていることになる。

また、追悼弁論に対するソクラテスの批判は、追悼弁論が「他国の人々」に対して効力を持たない点に留まらない。ソクラテスは、追悼弁論がアテナイ市民に与える効果もまた時限的なものに過ぎないことを遠まわしに批判している。ソクラテスは追悼弁論がアテナイ市民に与える効果を次のように表現する。

そしてこの威厳はぼくのもとで三日以上とどまるのです。それほどまでにありありと語り手の言葉と声は耳に残るものだから、四日ないし五日目になってかろうじて我に返り、ぼくがどの土地にいるのかに気づくのだ。それまではまさに幸福者たちの島に住んでいるのではないかと思っているのだがね。(Menex. 235c1-3)

この箇所でもソクラテスは表向きには追悼弁論の効果を誉めている。しかし、ソクラテスの本心は、追悼弁論の効果がたった三日程度しか持続しないことの批判にある。また追悼弁論の効果がこれほどに短いことは、追悼弁論がソクラテスの知人である「他国の人々」を騙すことができないという事実と関係していると考えべきである。何故なら、追悼弁論を聞いて一時心地よく騙されたアテナイ市民がその後追悼弁論によって騙されていたに過ぎないという現実次第に連れ戻されることになるという事態の背景には、その後の「他国の人々」との交際という大きな要因があるはずだからである。

## B) 追悼弁論は「優れた弁論家」を必要としない

既に述べたように追悼弁論は「他国の人々」に対する説得力という点で弱点を持っている。プラトンはこのことの原因を 追悼弁論というジャンル そのものがもつ本質に帰している。何故なら彼は追悼弁論というものがそもそも「他国の人々」を説得することを目的とするものではないことを明らかにしているからである。ソクラテスは、追悼弁論の語り手として突然名指しされた人の苦労を慮って「選ばれた人はそう簡単になし遂げられないでしょう」(235c7) と語るメネクセノスに対して次のように応じている。

どうしてだね。君。このような人々には既に幾つかの弁論が準備されているのだし、少なくともそのような事柄に関しては即興で語ることも難しいことではないのだ。というのは、もしかりにペロポネソス人を前にしてアテナイ人のことを誉めたり、アテナイ人を前にしてペロポネソス人を誉めたりしなければならないのだとしたら[聴衆を]説得して好評を獲得するには、優れた弁論家 agathos rhêtôr が必要であろう。し

かしまさに誉めている当の人々を前にして[好評を]競うのであれば、巧みに語っているという評判を得ることは大仕事ではないのだ。(Menex.235d1-6)

引用文中の「このような人々」とは追悼弁論の語り手として突然名指しされた人、「そのような事柄」とは追悼弁論で語るべき事柄のことである。するとここでソクラテスが追悼弁論のことを「まさに誉めている当の人々を前にして[好評を]競う」弁論であると理解していることがわかる。つまり追悼弁論なるものは「他国の人々」の説得という目的をはじめから放棄し、自国の人々を説得することを目指すだけの弁論であることになる。そしてソクラテスはこのような追悼弁論を「大仕事ではない」と主張し、それゆえにまた、追悼弁論なるものは「優れた弁論家」を必要としないと主張している。ここでソクラテスが言う「優れた弁論家」とは「ペロポンネソス人を前にしてアテナイ人のことを誉めたり、アテナイ人を前にしてペロポンネソス人を誉めたり」することができるような弁論家のことである。従って、ソクラテスが言いたいのは、追悼弁論で喝采を受けるためには、アテナイ人の前でアテナイ人を誉めることができるだけのいわば凡庸な弁論家であれば十分であり「優れた弁論家」は必要ないということである。別の言い方をすれば追悼弁論とは「優れた弁論家」がその本領を発揮できないようなジャンルであるということになる。

以上の理解を前提にし、以下「追悼弁論」における皮肉の内実を明らかにしたい。

## 5) 皮肉の内実

### A) 「追悼弁論」の作成者としてのアスパシア

まず注目すべきは対話篇中のソクラテスが「追悼弁論」の作者を「弁論術にかけては凡庸ではない女教師」(Menex. 235e3-4)であり「他にも多くの優れた弁論家を育て、とりわけ一人の、ギリシア人の間でぬきんてた弁論家、クサンティッポスの子ペリクレスを育てた」(Menex. 235e4-7)女性アスパシアに帰している点である。ソクラテスは言う。

僕自身は自前ではおそらく何も語るべきものを持ってはいない。しかし昨日もまた、アスパシアがかの戦死者のための追悼演説を試みているのを聞いたのだ。つまり彼女も、君が知っていること、つまりアテナイ人達が語り手を選ぼうとしているということを聞いたのだ。そこで彼女は、その語り手が語るべき内容として、そのある部分は即席のものを、また別の部分は以前に　ぼくが思うにそれはペリクレスが語ったかの追悼弁論を彼女が起草した時のことであるが　彼女がじっくり考えたものを、かの追悼弁論の残余をつなぎ合わせる形で、語り聞かせてくれたのである。(Menex. 236a8-237b6)

この箇所から、対話篇中のソクラテスが、アスパシアという「優れた弁論家」のことをペリクレスの追悼弁論と「追悼弁論」という二つの追悼弁論の作者であるとみなしていることがわかる。さらに、後者が「即席のもの」と「かの追悼弁論

の残余」から成り立っているということから、著者プラトンが「追悼弁論」を名高いペリクレスの追悼弁論から除外された部分を含むものとして位置づけているということがわかる。従ってプラトンが「追悼弁論」を書いた意図を知るためには、同じアスパシアの作ということになっているこれら二つの弁論の差異を明らかにすることが肝要である。

#### B) ソクラテスの語る「追悼弁論」とペリクレスの追悼弁論

既に述べたように『メネクセノス』の邦訳者の一人である津村は、ソクラテスの語る「追悼弁論」がアテナイ人の「生まれをほめること」「祖先をほめること」「アテナイの国制の称賛」「戦死者の息子たちに対する国家の称賛」等の追悼弁論に典型的な話題を含むことを指摘し、「追悼弁論」が典型的な追悼弁論であるとしている。事実、これらの話題はいずれもペリクレスの追悼弁論にも見出しうるものであり、その意味で二つの追悼弁論の間には確かに類似性がある。しかし両者の間の明らかな相違点を見逃してはならない。

ペリクレスの追悼弁論における重要な特徴は、追悼弁論の聞き手に対する配慮である。弁論の冒頭でペリクレスは以下のように述べている。

多くの勇士らの勇徳が、わずか一人の弁者の言葉の巧拙によって褒貶され、その言うなりに評価される危険は断じて排すべきだと私は思う。なぜならば、真実の評価をなすべき基礎を欠く場合、公正な発言をおこなうことはきわめて難しい。事実を知り同情に耳を傾ける者は、己の心情や理解が弁者の言葉には汲みつくされていないと考えるであろう。逆に、事実をわきまえず、しかも己の力量をもってしては為しがたい事績を聞いて嫉妬する者は、弁者の誇張を憤る場合も多々あるからだ。なぜなら、他者への讃辞は聞き手の自信を限界とし、その内にとどまれば素直に納受されるが、これを越えて讃辞を述べれば、聞き手の嫉妬と不信をかうにとどまる。しかしながら、戦没者への讃辞は古人が嘉しとした慣例ゆえ、私も仕来りを守り、諸君のできるだけ多くの人々の心情と理解を言葉につくすよう、努めなくてはならぬ。(Hist. ii, 35, 1-3、久保訳)

ここでペリクレスは戦没者の榮譽を言葉によって讃えることの限界を話題にし様々な聞き手の受け取り方の違いに言及している。そして彼はそれでもなお「仕来りを守り」追悼弁論を語ることを宣言する。弁論に先立ち自らの言葉の力の限界を話題にするこのような語り方は当時の弁論術の常套手段である。ただ上の引用文中にあるような様々な聞き手の受け取り方の違いについての明確な言及は彼の追悼弁論に特徴的なものである。これに対してソクラテスの語る「追悼弁論」は、同じアスパシア作ということになっているにもかかわらず様々な聞き手の受け取り方の違いに対する言及が一切欠けている。そののみならずそこには、自らの言葉の力の限界に言及し、謙虚さをアピールする通常の弁論の常套句さえも見出しえない。それどころか「追悼弁論」の序の部分にある「立派に成し遂げられた行為についての記憶とその行為をなした人々に対する尊敬の念は、

見事に語られた言葉によって「その言葉を」聞く者の側から生じるからである (*Menex.* 236e1-3)」という言葉は逆に自分の言葉の威力を誇示する弁論家の傲慢さを印象づける。このように二つの追悼弁論は<様々な聞き手の受け取り方の違い>に対する配慮を示す言葉の有無という点で明らかな対比をなしている。

さらに、このような配慮の有無が二つの追悼弁論の間のいくつかの重要な差異の原因になっていることがわかる。これら二つの追悼弁論は、津村が指摘しているように、いずれもアテナイ人の(1)「生まれをほめること」(2)「祖先をほめること」(3)「アテナイの国制の称賛」(4)「戦死者の息子たちに対する国家の称賛」という追悼弁論における典型的な話題を取り上げる。しかしこれらのうち少なくとも(1)(2)(3)の話題の取り上げ方において、二つの追悼弁論は明確な差異を示している。

ペリクレスの追悼弁論は(2)の話題、つまり、アテナイ人たちの過去の事績に関する話題を極限まで切り詰めて語っている (cf. *Hist.* ii, 36.1-3)。彼は、アテナイの歴史を「祖先」「父」「我々」の時代に分類したうえで各時代の人々の事績をごく手短かに賛美する。「祖先」たちについての彼の賛美は「この土を、わが血脈の祖先らは古えよりつねに住み耕やし、その自由を守る勇徳によって世々今日にいたるまで子らにゆずりわたしてきた (久保訳)」というもの。「父」たちについての賛美は「古き領土に加えて、嘗々辛苦して今日の支配権を獲得し、これを今日の我らに残していった (久保訳)」というもの。さらに「我々」の時代についての賛美は「受け継いだ支配をいや増しに押し拡げ、わがポリスの備えをあらゆる面で充実させ、和戦のいずれを問わず、かつてなき完全な体勢を把握するにいたった (久保訳)」というものである。アテナイの過去を賛美するこれらのペリクレスの言葉は著しく具体性を欠いている。そして彼がこの話題に費やしているのはこれらの言葉のみである。これに相当するペリクレスの言葉は彼の追悼弁論全体の約6パーセントに過ぎない。これに対しソクラテスの語る「追悼弁論」はアテナイ人たちの過去の事績を具体的な歴史的イベントに言及しつつ詳細に語り、この話題のためだけに「追悼弁論」全体の実に約半分 (*Menex.* 239a1-246a4) を費やしている。この点で二つの追悼弁論の間の差異は歴然としている。しかもこれは偶然ではない。アテナイ人たちの過去の事績に関してのペリクレスの以上のような取り扱いとは明らかに意図的なものだからである。彼は次のように述べている。

九  
七

ここに到達するまでの戦の道程は、われらや父たちがギリシアの内外から襲う敵勢を勇敢に撃退し、かの戦にはこの地を、この戦にはかの地を得たという一々の手柄話に伝えられていて、諸君は既に熟知のこと、長々とこれを繰り延べることを省きたい。しかしながら、われらが如何なる理想を追求して今日への道を歩んできたのか、いかなる政治を理想とし、いかなる人間を理想とすることによって今日のアテナイの大をなすこととなったのか、これを先ず私は明らかにして戦没将士に捧げる讃辞の前置きとしたい。この理念を語ることは今この場にまことにふさわしく、また市民も他国

の人々 xenoi もこの場に集うすべて、これに耳を傾けるものには益する所があると信ずる。(Hist. ii, 36.3、久保訳)

ペリクレスはアテナイ人たちの過去の事績を長々と語らない理由をここで「既に熟知のこと」だからとしている。このような口実で話を短くすることもまた弁論家の常套手段ではある。しかしここで彼がアテナイ人たちの過去の事績を語らなかったことにはただ単に話を短くすること以上の意図を見て取るべきである。引用文中に「市民も他国の人々も」という言葉があることからわかるように、ペリクレスは彼の追悼弁論の聞き手のうちに「他国の人々」を意識している。既に指摘したように彼の追悼弁論のうちには<様々な聞き手の受け取り方の違い>に対する明確な配慮がある。そうであるとなると、彼がアテナイ人たちの過去の事績に敢えて触れることを避けたのは、聞き手のうちに混在する「他国の人々」への配慮が原因であると考えられるべきである。つまりペリクレスは、全ギリシア的には毀誉褒貶にさらされているアテナイ人たちの過去の事績の評価に触れることを意図的に避けたと考えられる。他方、ペリクレスの追悼弁論のこのような特徴と対比してみると、ソクラテスの語る「追悼弁論」の特徴があきらかになる。それは、聞き手の中に「他国の人々」が散在していることを知っていながら、ペリクレスが敢えて長くは語らなかった過去のアテナイ人たちの事績を弁論全体のほぼ半分を費やして語っている。しかもこのアテナイの過去の事績を称賛する「追悼弁論」中の言葉は、既に引用した津村の指摘にもあるように、数々の歴史的事実の歪曲を含んでいる。「追悼弁論」はその意味で<様々な聞き手の受け取り方の違い>に対する配慮を明らかに欠いた弁論、それどころか、逆に意図的に「他国の人々」の神経を逆なでするような効果を持つ弁論になっている。

またペリクレスの追悼弁論は(1)の話題、つまり「生れをほめること」という話題の取り扱いにおいても明確な特徴を示している。既に述べたように「生れをほめること」は古典期アテナイの追悼弁論における常套手段の一つであり、その典型を例えばリュシアスの追悼弁論のうちに見出すことができる。それは次のような言葉である。

〔我々の祖先は〕他の多くの人々がそうしたように、あちこちから集められ他の人々を追放してよその土地に住み着いたのではなく、土着の民として autochthones ontes、同一の土地を母とも祖国ともしてきたのである。(cf. Epitaph. 17)

ペリクレスの追悼弁論はこの「生れをほめること」という話題においても極めて消極的である。彼の追悼弁論においてこの話題に相当する箇所は、既に引用した「祖先」の事績を賛美する言葉の中の「この土を、わが血脈の祖先らは古えよりつねに住み耕やし tên gar chôran hoi autoi oikûntes」というギリシア語にしてわずか6語に相当する語句のみである。この話題についてのこのような極めて消極的な取り扱いも、聞き手のうちに散在する「他国の人々」に配慮するペリクレスの態度の表れであるといえる。他方でソクラテスの語る「追悼弁論」はこの「生れをほめる」という話題のために弁論全体の約9パーセント (Menex. 237b1-

238b6) を費やし、アテナイの祖先たちが「土着の人々 *autochthones* (*Menex.* 237b6)」であるという主張を神話にまで遡ることで念入りに証拠づけ、彼らの「生まれのよさ *eugeneia* (*Menex.* 237b6)」を賛美しようとしている。ペリクレスの追悼弁論がこの話題のために僅か6語しか費やしていない点からすると、この点でも二つの追悼弁論の差異は明らかである。そしてこのことからソクラテスの語る「追悼弁論」が 様々な聞き手の受け取り方の違い に対する配慮を明らかに欠くものであることがわかる。

最後に(3)の話題、つまり「アテナイの国制の称賛」という話題の取り上げ方を比較してみたい。ペリクレスの追悼弁論は「われらが如何なる理想を追求して今日への道を歩んできたのか、いかなる政治を理想とし、いかなる人間を理想とすることによって今日のアテナイの大をなすこととなったのか」を示すことに集中している。ペリクレスはこの話題のために彼の追悼弁論全体の実に半分 (*Hist.* ii, 37-41) を費やしている。彼がこの話題に関してこれほど多くの言葉を費やした動機は「この理念を語ることは今この場にまことにふさわしく、また市民も他国の人々もこの場に集うすべて、これに耳を傾けるものには益する所がある」という彼の言葉に表れている。つまり彼は、アテナイ人たちの過去の事績に関する歴史的な評価はともかくとして、アテナイの国制という「理念」そのものは普遍的評価を受けるに値すると信じているのである。他方で、ソクラテスの語る「追悼弁論」はこの「アテナイの国制の称賛」という話題についてはどちらかというと消極的である。「追悼弁論」がこの話題に費やしているのは「追悼弁論」全体の約10パーセント (*Menex.* 238b7-239a4) に過ぎない。「追悼弁論」は、この話題を導入する際、「この国制については手短かに述べておくのがよいであろう」 (*Menex.* 238b8-c1) と述べている。つまりプラトンは、ペリクレスが聞き手の中の「他国の人々」を意識して敢えて長々と語った「アテナイの国制の称賛」を意図的に「手短か」に語るに留めているのである。

以上のことからプラトンは二つの追悼弁論を同じアスパシアの作であるとしつつも両者の間に意図的に際立った差異を生じさせている。ペリクレスの追悼弁論は 様々な聞き手の受け取り方の違い に配慮し、とりわけ聞き手の中に散在する「他国の人々」を意識している。彼はその結果(1)「アテナイ人の生れのよさ」(2)「アテナイ人の過去の事績」という話題に触れるのをできる限り避け、話題を(3)「アテナイの国制の賛美」へと集中させている。これに対してプラトンは、そのような配慮を示す言葉を「追悼弁論」のうちから抹消し、逆に、聞き手の中に散在する「他国の人々」の神経を逆なでするような(1)(2)の話題を長々と取り上げ、ペリクレスが「他国の人々」の理解を得られると期待した(3)の話題への詳細な言及を避けているのである。

このように二つの追悼弁論には明らかな差異がある。そしてそれにもかかわらず、プラトンは、これら二つの追悼弁論を同じアスパシアの作であるとしている。このことでプラトンは何を意図したのか。次にこの点に答えてみたい。

### C) ペリクレスの追悼弁論の戯画化

これまでのところで、ペリクレスの追悼弁論が、様々な聞き手の受け取り方の違いに配慮し、とりわけ聞き手のうちに含まれる「他国の人々」を説得するために最善の努力をしている点を論じてきた。しかし彼の追悼弁論がそのような努力をなしていることと、その追悼弁論が実際に「他国の人々」に対して説得力を持つものであることとは同一のことではない。むしろ彼の追悼弁論は成功していないと考えるべきである。というのは、ペリクレスの追悼弁論の中心をなす「アテナイの国政の賛美」のうちにも「他国の人々」に対する説得力を持ち得ない言説を多数見出すことができるからである。例えば「われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範を習わしめるものである (Hist. ii, 37, 1、久保訳)」という言葉、「我らのポリスに対してのみは敗退した敵すらも畏怖をつよくして恨みを残さず、従う属国も盟主の徳をみとめて非難をならさない (Hist. ii, 41, 3、久保訳)」という言葉はその典型といえる。アテナイの属国からきた「他国の人々」がこの言葉に同意するとは考えられない。またペリクレスはしばしば敵であるスパルタとの対比により自国アテナイの優越を語っている。「過酷な訓練ではなく自由の気風により、規律の強要によらず勇武の気質によって、われらは生命を賭する危機をも肯ずるとすれば、はや此処にわれらの利点がある (Hist. ii, 39, 4、久保訳)」という言葉がその一例である。この言葉が「アテナイ人たちを前にして」称賛を獲得しうるものではあっても「ペロポネソス人 (つまりスパルタ人) を前にして」称賛を獲得しうるものではないことは明らかである。つまり、ペリクレスの追悼弁論は、確かに様々な聞き手の受け取り方の違いへの配慮に基づくものではあるが「他国の人々」に対する説得という点ではそのような配慮も結局は無効になっている。この点にプラトンは気づいていたはずである。そしてこのことからソクラテスが語る「追悼弁論」を書いたプラトンの意図を推測することができる。

そのための重要な手がかりは、対話篇中のソクラテスが「追悼弁論」のことを「そのある部分は即席のものを、また別の部分は以前に (中略) 彼女がじっくり考えたものをかの追悼弁論の残余をつなぎ合わせる形で、語り聞かせてくれた」と述べている箇所である。ここに「かの追悼弁論の残余」と言う言葉がある。さしあたり明らかなのは、この言葉が、アスパシアがペリクレスの追悼弁論を起草する際に採用しなかった部分のことを指しているということである。そして、本稿におけるこれまでの考察から明らかなのは、このアスパシアがペリクレスの追悼弁論の採用しなかった部分とは、つまるところ、彼女がペリクレスの追悼弁論の聴衆の中に散在する「他国の人々」に配慮した結果採用しなかった部分のことであるということになる。この部分はペリクレスの追悼弁論のいわば陰の部分である。アスパシアはペリクレスの追悼弁論を起草する際に「他国の人々」の説得の妨げになるような陰の部分を隠蔽しようとした。ところが既に指摘した通り、ペリクレスの追悼弁論はいかに周到に<影の部分>を隠そうとしても

その<陰の部分>と同質の独りよがりなアテナイ賛美をその弁論のうちから完全に排除することはできなかった。追悼弁論というジャンル がそれを認めないからである。そしてその結果ペリクレスの追悼弁論は、アスパシアの努力にもかかわらず、「他国の人々」にとっては説得力のある弁論となることはできなかった。「他国の人々」はペリクレスの追悼弁論中に残存する独りよがりなアテナイ賛美に触れることで、アスパシアが隠蔽しようとした 陰の部分 の全貌に気がつくことになるからである。このように考えると、ペリクレスの追悼弁論は、聴衆全体に対して説得力ある追悼弁論を目指した優れた弁論家が<追悼弁論というジャンル>そのものの持つ限界ゆえに、大きな説得力を持ちえなかった事例であることになる。そしてプラトンは「優れた弁論家」アスパシアでさえ免れることができなかった 追悼弁論というジャンル に本質的な欠陥を明確にするためにペリクレスの追悼弁論が隠そうとした 陰の部分 を敢えてグロテスクなまでに強調して前面に押し出し、そのことによってペリクレスの追悼弁論の戯画を作り上げた。それがソクラテスの語る「追悼弁論」の正体であると考えられる。プラトンは、「他国の人々」に対して如何なる説得力も持ち得ないような「追悼弁論」を示し、ペリクレスの追悼弁論もまた「他国の人々」にとってはそれ以上に説得力を持つものではないと言おうとしたのである。そして、そのことを通して、彼は 追悼弁論というジャンル を批判しようとしている。プラトンが「追悼弁論」を書くことで意図したのはそのような意味での皮肉であると考えるべきである。

## 6) 「優れた弁論家」

以上の考察によりソクラテスの語る「追悼弁論」における皮肉の内実を明らかにした。しかし対話篇『メネクセノス』全体を執筆したプラトンの意図はどのような意味での皮肉に留まらない。同対話篇全体の主題は、追悼弁論というジャンル を揶揄する一方で、むしろ「優れた弁論家」についての新たな視点を呈示するという点にある。

同対話篇においてソクラテスは「優れた弁論家」の実例としてアスパシアの名をあげている。ここでの「優れた弁論家」の内実について同対話篇は詳しく取り上げることはしない。プラトンがここで明確にしているのは「優れた弁論家」なるものが「ペロポネソス人を前にしてアテナイ人のことを誉めたり、アテナイ人を前にしてペロポネソス人を誉めたり」することができるという点のみである。

しかし同対話篇におけるアスパシアが「ペリクレスを育てた」(*Menex.* 235e)という言葉を手がかりにすれば、ここでの「優れた弁論家」の内実をより詳細に知ることができる。プラトンは、アスパシアの弟子ペリクレスの弁論術の特徴を、対話篇『パイドロス』の中で明らかにしているからである。同対話篇においてソクラテスは、ペリクレスが「弁論術に関して全ての人々の中でもっとも完全な者」(*Phaedr.* 269e1-2) になることができた秘訣を、彼が「魂の本性 *psychês physis*」

(*Phaedr.* 270c1) を正しく理解したという点に見出し、その「魂の本性」の理解と弁論術との関係を「弁論の能力が魂を導くこと *psychagôgê* である以上、将来弁論家になろうとしている者はどれだけの種類の魂があるのかを知らねばならない」(*Phaedr.* 271c10-d1) という言葉で述べている。つまり優れた弁論家になるためには聴衆の魂の種類を分類することが必要であるということである。このような「優れた弁論家」の特性は明らかに『メネクセノス』における「優れた弁論家」の特性と一致する。「ペロポネソス人を前にしてアテナイ人のことを誉めたり、アテナイ人を前にしてペロポネソス人を誉めたり」することができる弁論家は当然、アテナイ人の魂とペロポネソス人の魂のそれぞれの特性を理解していなければならないはずだからである。このことから『メネクセノス』における「優れた弁論家」の内実を聴衆の魂の種類を分類研究できる弁論家であるとみなすことができる。

またこのような意味での「優れた弁論家」像はアリストテレスの『弁論術』にも少なからぬ影響を与えている。アリストテレスは次のように述べている。

演示的弁論においては、聞き手に、自分自身、自分の一族、自分の仕事、あるいは何らかそのようなことが、共に賞賛されていると思わせなければならない。実際、追悼弁論においてソクラテスが「アテナイの人々のところでアテナイの人々を賞賛するのは困難ではないが、ラケダイモンの人々のところでは難しい」と言っているのは真実であるから。( *Rhet.* 1415b28-32)

この箇所からアリストテレスが『メネクセノス』の影響を受けていることは明らかである。この箇所では彼は『メネクセノス』におけるソクラテスの言葉に従い、ラケダイモン（スパルタ）の人々のところでアテナイの人々を賞賛することが困難なことであることを認め、その上で、その困難な仕事を可能にする方法論を模索する。彼はまずその仕事を可能にする条件を明らかにする。彼によればそれは、アテナイの人々を賞賛する言論を聞いたラケダイモン（スパルタ）の人々が自分もまた「共に賞賛されている」と思い込むという事態である。アリストテレスはさらにそのような事態を生じさせるための方法論を明らかにする。彼は次のように述べる。

ソクラテスが言ったように、アテナイ人たちのところでアテナイ人たちを賞賛することは難しくはない。スキュタイ人たちあるいはラコニア人たちのところであっても、あるいは哲学者たちのところであっても同じことであるが、それぞれの聴衆のもとで尊重されているような性質が〔賞賛される者のうちに〕備っているのだということを述べねばならないのである。( *Rhet.* 1367b7-11)

ここでアリストテレスが述べているのは、上述の事態を生じさせるためには、弁論の聞き手を「スキュタイ人」「ラコニア人」あるいは「哲学者」といった様々の種類に分類した上で、各々の人々のもとで「尊重されているような性質」を明らかにし、賞賛の対象になっている人々の中にそれらの性質が属していることを示すことが必要であるということである。これはつまりどのような人々がどのよ

うな性質を尊重しているかを研究すること、すなわち、聴衆の魂の種類を分類研究することが必要であるということである。このようなアリストテレスの理論は、明らかにプラトンの『メネクセノス』『パイドロス』における「優れた弁論家」像を引き継いでいる。

さて、これまでの考察から『メネクセノス』における「優れた弁論家」の内実が、聴衆の魂の種類を分類研究することを通じてあらゆる種類の聴衆を「魔法」にかけることができる弁論家を指していることがわかる。このような観点から考えると『メネクセノス』を執筆したプラトンの意図を次のように要約することができる。つまり、プラトンは、聴衆の魂の分類研究に基づく「優れた弁論家」の能力を無効にしてしまう 追悼弁論というジャンル を批判すると共に、そのようなジャンルのうちに弁論術の典型を探し求める世間の風潮 青年メネクセノスがそれを代表しているのであるが を揶揄している。そしてプラトンはその一方で、本当の意味での「優れた弁論家」の何たるかを示唆しようとしているのである。

また以上の観点から対話篇『メネクセノス』を理解するとき、同対話篇末尾のソクラテスの言葉が極めて意味深く響く。そこで彼はメネクセノスに「今度君に彼女〔アスパシア〕から聞いた多くの立派な政治弁論を話してあげる」(Menex. 249e4-5) という約束をしている。ソクラテスのこの約束の意味は、本稿での考察を前提にすると、次の機会に「優れた弁論家」が作った本当の意味での強力な説得力を持つ弁論を聞かせるということの約束であると解しうる。何故なら政治弁論こそ、様々な立場や意見を持った聴衆、すなわち、様々な魂を持った聴衆を相手にする困難な それゆえにまた「優れた弁論家」がその本領を発揮することができる 弁論の典型だからである。

(注) なおこの点は『メネクセノス』の現行の二つの日本語訳からは明確にならない。該当箇所の加来の日本語訳は「というのは、彼ら外国の人たちもまた、ぼく個人に対してだけではなく、この国に対しても、ぼくが受けたのと同じ印象を受けるらしいからね。つまり、演説する人によって認識をあらためさせられて、この国が以前に思っていたよりも、ずっとすばらしい国であるように考えるわけなのだ」というもの。津村の日本語訳は「というのは実際彼らの方でも、僕や他の市民みんなに対して、同じこと感じているように思われるからだよ。彼らは演説者に説きふせられて、この国を以前思っていたより、ずっとすばらしい国だと考えるらしいのだ」というものである。これらの訳はいずれも dokûsi moi (235bd) を「らしいからね (加来)」「思われるからだよ (津村)」と訳し、この言葉を対話篇中でメネクセノスに向かって話しかけている時点における既に「魔術」から覚めた冷静なソクラテスの判断に相当するものとして理解している。これに対し本稿においては、ここでの dokûsi moi を、ソクラテスが他国の人々と一緒に追悼弁論を聞いている時点における「魔法」にかけられて騙されている状態でのソクラテスの判断に相当するものと理解し「かのように僕には思われ」

と訳した。その理由は、ここで追悼弁論なるものが「アテナイ人の間でアテナイ人を誉める」ことを狙いとする弁論であると規定されている以上、そのような弁論は他国の人々を説得することができるようなものではないと考えるべきだからである。そしてそのように解する限り、この箇所をアテナイ滞在中の他国の人々がアテナイ人によるアテナイ賛美の演説を聞いてアテナイ市民と同じように騙されてしまう状況を意味するものと理解することは困難であると考ええる。なお Loeb に収録されている Bury による英訳もまた加来訳、津村訳と同じ理解に基づいている："for they also manifestly share in my feelings with regard both to me and the rest of our City, believing it to be more marvelous than before, owing to the persuasive eloquence of the speaker."

### 参考文献一覧

#### 使用テキスト

- Plato, *Menexenus*, in *Platonis Opera tomus iii*, ed. Ioannes Burnet, Oxford Classical Texts, 1903  
Plato, *Phaedrus*, in *Platonis Opera tomus i*, ed. Ioannes Burnet, Oxford Classical Texts, 1900  
Aristoteles, *Ars Rhetorica*, ed. W.D. Ross, Oxford Classical Texts, 1959  
Cicero, *Orator*, *Cicero v*, Loeb Classical Library, 1939  
Lysias, *Epitaphios tois korinthiôn boêtois*, in *Lysiae Orationes*, ed. Hude, Oxford Classical Texts, 1912  
Thucydides, *Historiae tomus i*, ed. Jones, Oxford Classical Texts, 1900

#### 翻訳

- Bury, *Menexenus*, in *Plato ix*, Loeb Classical Library, 1929  
加来彰俊、「メネクセノス 戦死者のための追悼演説」  
『プラトン』（世界の名著 6）田中美知太郎編、中央公論社、1966  
津村寛二、「メネクセノス」「メネクセノス」解説  
『プラトン全集10』田中美知太郎・藤沢令夫編、岩波書店、1975  
久保正彰、テューキュディデース『戦史 上』、岩波書店、1966  
(倫理学専攻：講師)